

のである。

新羅末期の八七二年に塔を再建した際に刻された「皇龍寺刹柱本記」に、九層塔を建てることで「海東諸国がく汝の国に降る」といい、「果たして三韓を合わせて以って一家と為す」とあるように、九層塔によつて「三韓」を統合するという信仰が見られる。高麗太祖は、後三国の統一以前に、新羅の例に倣つて自分も塔をたてることで「群醜を除き、三韓を合わせて一家と為」したいと語っており、やはり九層塔により「三韓」を統合するという信仰が見られる。

ところが、『三国遺事』に引かれた『東都成立記』をみると、九層塔への信仰が「隣国の災いを鎮める」というものに変化し、塔の九層それぞれに日本・中国など具体的な国名が当てはめられ、その第四層に耽羅がみられるのである。『東都成立記』著述年代については高麗時代初期という説が有力であり、したがって、高麗による後三国統一を境に、九層塔信仰が、「三韓」

の統合から周辺諸国を鎮めるものへと変化を遂げていることになる。耽羅は「隣国」という排除される対象であつて、「三韓」という新羅の統合意識の中には含まれていなかったことがわかる。

以上の検討をまとめると、新羅の耽羅観は、支配はおよぶが統合の対象ではない、ということになる。また、新羅は、百済や高麗と比較すると、耽羅にたいする関心・評価が低いように思われるが、その背景には新羅王権の海洋にたいする消極性があつたと推測される。

### 宋代の南方政策と広南地域の士人

森 田 健太郎

宋代広南地域は、攝官制という、地元士人を現地任用する独自の官吏選任制度が用いられていた。宋初、広南の士人で科擧に合格する者は極めて少なく、多くは科擧を受験しながら、攝官制を頼り地元の下級官

職に就く傾向にあつた。中央政府においても、広南地域の科擧文化レベルを低く評価して、広南地域が僻遠にあつて北方士人が敬遠していたこともあり、攝官制を推し進めた。広南士人の多くは攝官制に頼つたが、一方で進士及第を目指す士人も少なくなかった。そこで発表者は二人の士人の事跡を例に挙げ、攝官制及び中央政府の偏見に対し、宋代、そして後世の広南士人達がいかなる主張を持っていたのかを探った。

まず、韶州の余靖という士人は、仁宗期に広南士人として数少ない進士及第を果たし、中央政府内、そして南北辺境において活躍した人物である。余靖の神道碑には、彼が唐玄宗朝の宰相張九齡以来の偉人として並び讃えられているが、一方で『宋史』等には、余靖が韶州で罪を受けたため、本貫取解の原則を破り、名を改めて他所で科擧に応じて進士及第に至ったことが記されている。また、余靖は王式の墓誌銘において、張九齡以来、広南地域から士大夫が輩出されない要因について攝官制を挙げ、余

靖は攝官制が広南士人にとって好ましくな  
いものだと考えていたことがわかる。宋初  
の広南士人層は張九齡を崇敬の対象とし、  
張九齡以来の榮譽を求めていた。そのこと  
が、多くの士人が攝官制に流れる中、科挙  
受験の原則を破ってまで進士及第に至らせ  
た。また後世の広南士人にとっては、偉人  
の出現が待望されていたため、余靖の前科  
は、彼を称賛することに対してなんら問題  
とはならなかった。

次に、馮京という士人は、科挙を三元で  
出た人物であった。馮京は一般に鄂州江夏  
の人と言われるが、広西の諸地方志には、  
彼が広南西路藤州、或いは宜州の出身とあ  
る。諸史料には、父親が商人であり、父式  
に随って鄂州に赴いて科挙に応じたことの  
他、広西に祖先の墓や馮氏ゆかりの村落が  
あったこと等が記されている。とくに藤州  
出身説は、南宋から明・清代の幾人かの士  
人達が証言している。近年河南省で発掘さ  
れた馮京の墓誌銘には、祖先が五代の戦乱  
時に河朔から藤州へ逃れ、祖父の死後に江

夏に移ったことがわかり、馮京の藤州出身  
説はほぼ間違いないものと思われる。しか  
し馮京の母朱氏の墓誌銘には広西へ赴いた  
形跡はなく、その点から、父式がいつごろ  
江夏へ移住したのか、また、馮京を広西の  
出身と認められるかどうかが問題となる。  
墓誌銘の記述からは、馮京の生前に移住し  
たとは考えられず、母朱氏との婚姻も、兄  
襄が生まれた大中祥符二年（一〇〇九）の  
前とすれば、墓誌銘にはなくとも、母朱氏  
も広西にいたと推測され、少なくとも、馮  
京の幼年時代までは広西に留まっていた可  
能性が高い。また、『東都事略』には馮京  
が父式の没後十一年後に進士及第したとあ  
り、皇祐元年（一〇五二）より十一年前  
（一〇四二）には江夏にいたと思われる。  
さらに朱氏の墓誌銘に広西の事跡がなく、  
鄂州での事跡のみ記されていることから、  
馮京は藤州出身ではあるが、江夏の人とす  
るのが妥当とすべきである。

馮京が江夏の人と認められるにも関わら  
ず、広西の士人達が藤州において馮京の遺

風を遺そうと努めた理由については、馮京  
という、後に科挙を三元で及第した偉人が  
藤州の出身であることが、科挙レベルの低  
い藤州にあつて重んじられた一面があり、  
明代には馮京にちなんで三元書院が建設さ  
れ、地元士人に崇敬される対象に祭り上げ  
られた。

余靖・馮京に共通するのは、彼ら自身に  
広南の偉人としての疑惑があるにも関わら  
ず、後世の士人達によって崇敬の対象にさ  
れたことである。当時中央政府にまだ科挙  
レベルが低く評価されていた状況の中で、  
広南士人達は同時代の偉人の出現を待ち、  
広南の科挙レベル向上のため、進士及第し  
て活躍した偉人達を崇敬した。また、余  
靖・馮京ともに五代時期に広南に移住した  
一族であり、その他の広南士人にも移住の  
経歴を持つ者が多く、広南への多くの漢人  
の南下と、宋代広南士人の偉人崇敬とが、  
何らかの繋がりを持っていたとも推察され  
る。